

# 創価大学

→ SOKA UNIVERSITY

## 国際教養学部の誕生で 加速する グローバル化の取り組み

1971年の開学以来、国際交流に力を入れ、グローバルに活躍する人材を育ててきた創価大学。2013年度新設の看護学部に加え、2014年度には新たに国際教養学部を設置。グローバル化の取り組みが加速する。

取材・文／堀水潤一 撮影(表紙)／広路和夫



↑ 創価大学正門。構内には約2500本の桜がある。

開学以来、国際化およびグローバル人材の育成に力を注ぎ、46カ国・地域の141大学と交流協定を結ぶ創価大学。

現在の受け入れ留学生は約300人だが、近いうちに500人に増やす予定だ。学生数が約8000人だから、16人に1人が留学生という計算になる。日本にいなから、世界につながっていることを実感できる国際的なキャンパスといえる。

また、海外への留学経験者は現在、年間600人。「2020年の創立50周年に年間1000人にする」という従前の目標は、4年早い2016年には達成する見込みだ。実現すれば、およそ半数の学生が、在学中に留学を経験することになる。

こうした国際化への取り組みは、2012年秋に文部科学省の「グローバル人材

育成推進事業」(特色型)に採択されたことでいっそう加速している。文科省は、同事業の目的を「若い世代の『内向き志向』を克服し、国際的な産業競争力の向上や国と国の絆の強化の基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材の育成を図るべく…」(以下省略)と説明しているが、創価大学国際部長の小出 稔教授(P7も参照)はこう語る。「本学の学生を見る限り、若者の内向き志向というのはあまり感じていません。1700人の新入生のうち留学ガイダンスへの出席者は1000人を超えるほどです。漠然としたあこがれを含め、多くの学生が海外を志向します。むしろ、留学に対する学生の不安といえば、金銭面や時期といった現実的なこと。大学として制度

面で支援していきたいと思っています」

実際、同大学では「交換留学」(交換協定を結ぶ大学への留学。返還義務のない国際奨学金の支給や、海外傷害保険を提供する)、「認定留学」(単位取得を目的とした英語圏への留学)、「夏季・春季短期海外研修」(海外交流校など2週間から1カ月程度の研修)ほか、多彩な留学制度を用意している。

### 全学部で 語学教育を拡充

創価大学が全学をあげて力を注いでいるのが語学力の向上だ。例えば経済学部では2001年より専門科目を英語で学ぶ「インターナショナル・プログラム」を

表1 創価大学におけるグローバル教育の一例

#### ●インターナショナル・プログラム (IP)

経済学部で2001年よりスタートしたプログラム。"content-based language learning"(専門科目学習を基に行う語学学習)により、経済学の知識と語学力の双方を鍛える。受講条件はTOEFL-ITP380点以上。IPで学んだ学生は、留学生と共に専門科目を英語で学ぶ「Japan Asia Studies Program」を履修可能。IP受講生を対象にした「IPシンガポール・キャリア研修」「IPカリフォルニア・キャリア研修」等各種の海外インターン研修も実施。

#### ●グローバル・シティズンシップ・プログラム (GCP)

「国際舞台で活躍したい」「海外の一流大学院に進学したい」などの意欲や能力をもつ学生を応援するために2010年にスタートしたプログラム。学部のカリキュラムと並行して4年間かけてグローバル人材に必要な力(語学力、課題発見・解決力、リーダーシップなど)を徹底的に磨く。①学部の枠を超えた全学部横断型、②徹底した英語教育と海外研修、③数理能力トレーニング、④少人数の独自ゼミ、⑤専任教員による個別指導などの特徴をもつ。

実施。2010年からは、学部横断型でグローバル人材を育成する「グローバル・シテイズンシップ・プログラム」もスタートしている。(表1)

それらの経験も踏まえ、「グローバル人材育成推進事業」の採択を受けた同大学は、今後「Global Citizen育成プログラム」(表2)を展開。全学部で、英語による専門分野の授業を導入する予定だ。また、各学部のカリキュラムとリンクした短期海外研修の開発や、長期留学の拡充などにも積極的に取り組んでいく。2013年には、留学を目指す学生をサポートする「留学情報ステーション」がオープン。同年9月には、新総合教育棟に「ラーニング・コモンズ」が開設され、語学力向上のための環境が整う。

## 2014年度に誕生する 国際教養学部

2014年度には、グローバル化の取り組みの集大成ともいえる「国際教養学部」が新設される予定だ。国際社会で活躍する人材の育成を目標に、「歴史・文化」「政治・国際関係」「経済・経営」の3分野を学際的に学ぶ学部である。

学部長はメキシコ系のアメリカ人女性(P7も参照)。日本語を含め合計で12言語を駆使する17名の教員がそろう、専門科目を含め、授業はすべて英語で行われる。卒業論文も英語で書く必要がある。

最大の特色は、1年次の後期から2年次の前期にかけて1年間の留学を必修で実施することだ。これは、2年次後期から3年次前期にかけて留学を実施することが多い、他大学の国際教養系学部よりも1年ほど早い。理由は2つある。1つめは、語学力の育成を日本で時間と労力をかけて行うより、思い切って早いうちに日本を飛びだし、現地で学ぶほうが効率的だと考えているから。もう1つは、帰国後、専門科目をしっかり学ばせたいという思いが強いからだ。確かに、3年次の後期に帰国したのでは、就職活動の時期と重なり、専門を深く学べない可能性がある。

そう考えるだけあって専門科目のカリ

キュラムは工夫されている。3年次は「歴史・文化」「政治・国際関係」「経済・経営」の3つの学問領域から専門選択科目を選ぶことになるが、その前段階でプレゼミというイントロダクション的な演習授業が用意されている。3つの学問領域をアカラル的に学ぶのではなく、例えば、「リーダーシップ」「マーケット」「グローバルイノベーション」といったテーマについて、それぞれの分野の教員が集い、チーム・ティーチングでアプローチすることで、学際的な学びを提供する。

「リーダーシップひとつとっても、国際関係論からみたそれと、ビジネスや歴史からみたそれでは違います。同じテーマでも多彩な切り口があることを学生に示したいと思っています」(小出教授)

## この場所が世界に つながっている認識を

創価大学にある既存学部の卒業生の中には、交換留学中に現地のインターンシップや企業説明会に参加して、海外の企業に就職する学生も少なくない。国際教養学部でも卒業生の3割程度が海外の企業に就職することを期待している。

「日本人がもつ特性を生かせるのは日

本の企業ばかりではありません。才能や技術を生かす選択肢が格段に広がるという意味でも、『世界就職』を視野に入れてほしいと思います」(小出教授)

いっほう、残りの7割は、従来どおり日本で働くことになる。その場合、国際教養学部で学ぶこと、あるいはグローバル人材としての素養を磨くことに、どういった意味があるのだろうか。小出教授は言う。

「私はよく学生に、『今の場所がアメリカにつながっていることを実感できるか』とたずねます。自分がいるところが、世界に開かれた空間であることを意識できる人と、クロズドな空間としか認識できない人では、受ける刺激も、くだす選択も違ってくるはず。どんなに情報化が進んでも人間が物理的に存在できる場所などわずかです。しかし、自分がいる空間の意味を変えることはできます。『世界就職』とは必ずしも外国の企業で働くことではありません。どこで働こうか、例えば日本の企業で働こうと、そこが世界につながっているという意識を強くもち、生き方・働き方をデザインしていくことだと思います」

グローバル人材とはそうした意識をもてる人。創価大学のキャンパスには、そうした人材を育むことができる環境が整っていると小出教授は言う。

表2 Global Citizen育成プログラム

<b>●徹底した語学教育</b>	
①	海外留学に必要な英語力を身につけるEnglish for Study Abroad (ESA)プログラム
②	国際的な仕事に就くための英語力を身につけるEnglish for Career Development (ECD)プログラム
③	16言語におよぶ多言語教育プログラムを提供し、第2外国語のスタンダード化を実施
④	5段階の習熟度別クラス編成に対応した英語カリキュラム
<b>●海外修学体験プログラムの拡充</b>	
①	各学部で短期海外研修プログラムを新設
②	第2外国語(7言語)の海外研修プログラムを実施
③	海外交流校の拡大
④	カナダ、オーストラリアで海外インターンシップ・プログラムを実施
⑤	Global Citizenへの留学を考察する「留学概論」
<b>●英語で学ぶ学部の専門科目が充実</b>	
経済学部	International Program(IP)
経営学部	Global Program(GP)
法学部	Peace & Human Rights Program(PHR)
文学部	Humanities in English Program(HEP)
教育学部	Program for Education in a Global Age for Soka University Students (PEGASUS)
工学部	国際技術協力 Educational Program(EP)

Interview!!

## グローバル社会に通用しうる 教養教育を展開

国際教養学部 学部長予定者 Maria Guajardo (マリア・グアハルド)



Soka University's Faculty of International Liberal Arts will prepare students to meet the demands of a fast-changing global environment. An international liberal arts education will prepare Soka University students for participation in a global society, developing 21st century job skills. Student outcomes will include the development of English language and cross-cultural skills, philosophical foundations, interdisciplinary awareness, analytical skills, and effective communication skills. The academic program will advance an interdisciplinary approach, working to synthesize broad historical perspectives, knowledge, and skills. Providing students with multiple disciplinary perspectives is essential to the education of global leaders capable of analyzing, evaluating and synthesizing information from various perspectives in order to formulate innovative solutions.

Students will be able to select from three academic fields: History and Culture, International Relations and Politics, and Economics and Business. Team Teaching will create a dynamic and interactive learning environment, where professors can model thinking in and across disciplines. The goal is to encourage students to achieve higher levels of synthesis and integration in their study of course material. Course Instruction in English, conducted by faculty from Soka University, will be complemented by study abroad in an English-speaking country for two semesters; all designed to integrate students in meaningful ways and expand cross-cultural understanding. Small class sizes will provide increased opportunity for student participation, increased student-teacher interaction, and a more active student role in the learning process.

創価大学 国際教養学部は、急速に変わりゆく現代の世界情勢のなかで求められるニーズに対応しうる、有用な人材を輩出することを目的としています。教養教育は、21世紀において求められる幅広い仕事のスキルを磨き、グローバル社会に通用する人間を育てます。卒業時には、実践的英語能力、異文化理解力、哲学的基盤、学際的思考、分析力、コミュニケーション力を身につけた学生を輩出します。そのためにこの学部では、広い歴史的な視野と知識、スキルを総合的に修得する、学際的学習に取り組みます。多様な学問からの観点を養うことは、創造的な問題解決方法を生み出すために必要な、異なる視点からの情報分析、評価、融合ができるグローバルリーダーを育成するために不可欠です。

本学部で学生は、歴史・文化、政治・国際関係、経済・経営の3つの学問分野から1つを選択します。異なる専門分野の複数の教員が授業を教える「チーム・ティーチング」を導入し、学問を超えた思考を促すダイナミックな学習環境を整えることで、授業で学ぶことを、より高いレベルで融合できるようにします。英語学習は、学部での授業に加え、2セメスターの海外留学を通して行います。留学プログラムはすべて、学生にとって価値的で異文化理解を深められる内容になっています。そして少人数授業を軸として、学生がより積極的に参加できる環境を作り、教員と学生の距離を縮め、学生が中心となって学習を行えるようにします。



## オンリーワンではなく、 ナンバーワンの学部を目指す

国際部長 小出 稔教授

私は創価大学卒業後、国際関係論を学ぶためアメリカに留学しました。地方出身である私は、身内のなかで初めての留学経験者でした。両親も行ったことがない土地に立ったとき、空間が果てしなく広がるような心地よさを感じ、何ともいえない昂揚感に包まれたものです。ただし、語学が苦手で、それまで外国人と話したこともなかったため大変苦労しました。今、教員の立場になり、教える子が英語もできずに海外の大学院に進学したいと言おうものなら、自分のことは棚に上げて「何を甘いことを」と叱るかもしれません(笑)。若者の情熱は応援しますが、フロンティアを切り開くためには、語学力やコミュニケーション力などの能力が必要です。幸い、私の時代と違い、今のキャンパスには多くの外国人留学生や、さまざまな志向をもつ学生が大勢います。自分と異なる集団

に身をさらすことで、大いに刺激を受け、力を磨いてほしいと願います。

2014年度に新設する国際教養学部はすべての授業が英語で行われます。他大学にある同名の学部のなかには授業を日本語で行うところもあるようですが、「グローバル人材育成推進事業」の採択校など社会的評価の高い大学では、ほぼ英語で行っています。本学の教授陣とカリキュラムはそうした大学に引けをとりません。

学部新設に際して、創価大学ならではのオンリーワンの学部名にするという議論もありました。けれど、あえて国際教養学部という名にこだわったのは、後発ながらナンバーワンの学部を目指すという意志の表れだと思ってください。学部名で検索したときに自分たちしかでこない学部ではなく、偏差値

という尺度も飲み込みながら、競争にさらされる学部であるべきと考えたからです。健全な競争は、自分たちを高めることになります。日本、さらには世界の大学と大いに切磋琢磨しながら創価大学ならではの魅力や価値を創造していきたいと思えます。

新学部就任を予定している外国の先生方と話題になるのは、入学した学生が、将来就く職業には、現時点では存在していないものもあるだろうということ。私の学生時代にインターネットビジネスがなかったように、グローバル化の進展は、新たな職やマーケットを生み出すはずで、今、当たり前のように使っている企業のカテゴリすら意味を失う時代になるかもしれません。そうしたとき、従来の枠にとらわれることなく、柔軟な思考で道を切り開くだけの教養や幅広い力を身につけてほしいと思えます。